

五四〇億円の大輸送

沖縄での通貨交換

かつて沖縄は、異国¹だった。太平洋戦争のうちにアメリカ領土に組み込まれ、昭和四十七年に返還されるまで、そこに日本人が暮らしながらも、日本²ではなかった。復帰に際しては、いくつもの困難があった。中でも注目を集めた大事業が、それまで使用されていた米ドルから円への通貨交換だった。

取材・文 河村清明



昭 和四十七年五月二日、港を望む高台から、夜の明けかけた東シナ海へと、不動の視線を送る男がいた。

眼前の風景はまだぼんやりと暗かった。目をこらして待ち続ける。と、やがて、マツチ箱に似た黒い艦影が二つ、オレンジがかった空と群青の海とを隔てる水平線の手前に、ポツリと浮かび上がった。来たっ！ 無事に着いたぞ。胸の高鳴りは抑えきれなかった。同時に、それまでに経験のないほ

ど、身の引き締まる思いがした。

すぐに港へ急いだ。商港ではなく米軍港が選ばれたのは、警備上の都合からだ。スクラムを組んで仕事に取り組んできた仲間たちも、男と同じ思いを抱えていたのか、事前に取り決めた配置へと早くも数人が姿を見せていた。

待ち望んだ輸送艦は、午前六時四十五分に着岸した。海上自衛隊の所有する「しれとこ」「おおすみ」の二隻だった。付近には多くの関係者とマスコミが集まってい

た。総額で五四〇億円、コンテナにして一六一個分の現金を、両艦が懐深く抱き込んでいたからだ。

現金の積み出しは八時過ぎに始まった。トラック五台で梯団^{ていだん}を組み、日本銀行那覇支店までの約一キロをノンストップで駆け抜けた。要所の交差点には警官が立ち、上空では米軍ヘリが旋回を続けた。厳重な警戒は、それだけこの現金輸送への世間の関心が高く、またわが国の戦後史に、一つの区切りを付ける大事業であることを物語っていた。

ピストン輸送を続けても、港からの積み出しには丸二日を要した。大部分は日本銀行那覇支店の金庫に納まり、一部は宮古・八重山へと運ばれ五月十五日を待った。

その五月十五日、いよいよ沖縄が日本の領土に復帰する。と同時に、ドルから円への通貨交換も始まる。まさに歴史的な一日を直後に控えて、携わる者のすべてが心の高揚を抑えきれなかった。

男は那覇支店の次長、名を堀内好訓^{こうくん}といった。支店長の新木文雄さらには五十余人の行員と共に、ここまで準備に準備を重ねてきた。

* (注).....文中の敬称は省略しました。また、役職名などはすべて当時のものです。

540億円の現金輸送は、当然のこととはいえ、ものものしい警戒のもとで行われた。輸送に使用された2隻の自衛隊輸送艦は、4月27日に大井埠頭を発った。世間の関心は非常に高く、5月2日、到着した那覇の米軍港を取り囲んだのは、関係者だけに限らず多くのマスコミも一緒だった。右の写真にてそのインタビューに答えているのが、日本銀行那覇支店・初代支店長の新本文雄である。



日本銀行にもあった。トラブル無く終了できるかどうかは、その時点で、まだ誰にもわからなかった。

沖縄がかってアメリカ

力の占領下にあったと聞いて、最近の若者は首をかしげるかもしれない。独自の文化を持つ琉球王国であったとは聞いたことがある。また米軍基地が多いとも知っている。でも、本当に沖縄はアメリカだったのか……そんな思いをぬぐいきれないのではないか。

太平洋戦争の終盤、沖縄では日米の軍隊が激しい戦いを繰り広げた。双方で二三十万人以上の死者が出た。

現金の移送を無事終えると、待ちわびた芝居のカーテンの上がる思いがした。沖縄全島を対象に、それまで流通していたすべてのドルを、六日間で円に換えなければならぬ。不安は住民だけでなく、

そのためアメリカも簡単に手放せなかったのだ。

沖縄が異国だったと伝えるこんなエピソードがある。

昭和三十三年、夏の甲子園に首里高校が出場した。初の沖縄代表だった。残念にも一回戦で敗退したが、せめてもの思い出にと、選手たちはグラウンドの土をカバンに入れて、帰りの飛行機に乗った。だが、到着した空港の検疫で、持ち込みは許可されなかった。あくまでも「外国の土」と判断されたからだ。球児にとってせっかくの思い出が、こうして海に捨てられた事実からも、日本における、異国だった沖縄の、ひどく淋しい現実が浮かび上がってくる。

自分たちはいったいどちらの国民なのか。中途半端な居心地の悪さは沖縄の住民から離れることがなかった。本土に復帰して、日本人として生活したい。そんなごく自然な願いがかなったのは、ようやくの昭和四十四年十一月だった。佐藤・二クソン両首脳による共同声明にて、沖縄の本土復帰が正式発表されたのだ。

歓迎すべき決定ではあったが、

不安も大きかった。日本への復帰は、こまかなことでいえば車の通行が右側から左側へ変わることを意味した。また戦後のこれまでに、生活の大部分で使用してきたドルが円に換わることもあった。いったいレートはどうなるのか、どういった手段で交換されるのか、さらにインフレは生じないのか、考えれば考えるほど、住民は不安を抑えきれなかった。

実はそれまでに二度、日本は通貨交換を経験している。一度は昭和二十八年に奄美大島で、さらに昭和四十三年には小笠原諸島にて行われたが、あたりまえのこと、沖縄全島が対象となると規模が違った。

だからこそ、実務を担当する日本銀行も準備に万全を期した。那覇支店は本土復帰の当日に開店したが、その開設準備室は一年前の四月十五日に産声を上げていた。初代支店長となった新木、次長の堀内、以下四名に辞令が下った。彼らの任務が重要であるのは明白だった。行内では、「誰が沖縄に行くのか」と噂されるほどの関心事でもあった。



開設当初の那覇支店の様子。現在、米軍住宅跡地を再開発した那覇新都心地区へ支店を移転する計画が進められている

那覇港に到着した現金は、5台のトラックによってピストン輸送された。地元警察の協力により、信号もすべてノンストップだった。



膨

大きな量の通貨交換は、昭和四十七年五月十五日、沖縄本土復帰の当日に始まった。

前日、付近を激しい雨が襲った。そのため全島一九〇カ所に設けられた交換所のうち、一カ所にだけは事前に通貨を届けられなかったが、本番を迎える前の態勢として

はまずまずの準備といえた。

四半世紀にわたる占領下の垢を、洗い流してくれているのか。降りしきる雨を見て、次長の堀内はそんなふうに思った。

日付の替わった午前零時、沖縄港に停泊中の船舶が一齐に汽笛を鳴らした。それはまさに沖縄県黎明の響きだった。と同時に、通貨交換作業の開始をも告げるものだった。

早朝、堀内は新木と共にアメリカの空軍基地に向かった。基地返還のセレモニーがあり、その立ち会いに呼ばれていたからだ。

勝負の朝を迎え、道すがら、堀内はあらためて新木との付き合い合いを思い起こした。

那覇支店の前にも、同じ職場で世話になったことがあった。各方面へのバランスを取りつつも、肝っ玉が据わり、時に鋭い決断力を見せる上司だった。将たる器はそれなりにいても、数少ない「将の将たる器」の一人。堀内にはそう感じられてならなかった。酒に強く、乱れることなく飲み続けたが、それでも支店設立の準備が始まってからは互いに忙しく、一緒に飲

む機会をあまり持てなかった。

通貨交換を迎えるまでに、共に頭を悩ませた課題も多かった。

まず、沖縄の通貨流通量を全体でいくらと推定するか。それが難題だった。通貨統計が存在しなかったため正確な数字はなく、さまざまな想定を重ねて約一億ドルと見積もった。当時のレート一ドル二二六〇円、交換に三六〇億円が必要と考えたのだ。ただ、これはあくまで交換の総額であり、実際にはさらなる余裕が必要だった。どの場所での程度の円が必要になるかが誰にもわからないためだ。倍を用意しては無駄が出てしまつ。そこで五〇%の余裕を見た。そうして必要総額は五四〇億円に設定された。

また、輸送手段の選定にも苦労が多かった。安全性や積載能力、



当時の様子を語る那覇支店・初代次長の堀内好訓氏。昭和28年、日本銀行に入行した。通貨交換に際しては不眠不休の作業が続いたが、「あの時の経験は、私にとっても他の行員にとってもきわめて貴重なものでした。携わった者すべてを成長させたと思います」と笑顔で振り返る。戦後処理の一翼を担えたとの満足感が、その表情にうかがえる。

さらにはコストを考慮する必要があった。さらに、広範な地域に散在する島々にどういった方法で現金を輸送するかも大きな問題であった。関係先による慎重な検討がなされ、いくつかの方法のうち、最終的に沖縄へは、自衛艦を使用し、の海路が選択された。支店長の新木は、自衛艦の使用に対する現地の心情を知りすぎていただけに、復帰直前まで現地の根回しに奔走した。

その新木が、沖縄での仕事に際して、何度も繰り返した言葉がある。

「(日銀の)本店を見るな。一〇〇%沖縄を向いて仕事をせよ」

つまりは地域や住民の利益を最優先に進めると注意を促したのだ。リーダーシップにあふれるその一言は、堀内の、そして支店全



米ドルから日本円への通貨交換は、昭和47年5月15日より6日間にわたって行われた。各地の交換所には行列ができ、それぞれの窓口は混雑を極めた。那覇市内のデパートでは「ドルよさようなら、円よこんにちは」とのキャッチフレーズが掲げられ、買い物での使用も、5月15日を境に円に変わった。

体の支えとなった。いよいよ始まる大作業の前に、堀内はもう一度その言葉を思い出した。

基地でのセレモニーが終わると、すぐに支店に向かった。八時に新木より那覇支店勤務の辞令を受け取った。

そして午前九時、日本銀行那覇支店は正式に産声を上げた。同時に、一八九の交換所でも一斉に通貨交換が始まった。

回収されたドルと交換されずに残った円は、各交換所から母店と呼ばれる市中銀行に持ち込まれ、一旦整理される。この後に母店では、各交換所が翌日必要とする円

の準備作業を行わなければならない。各所で一連の作業が終わるのは、たいてい空が白み始める頃だった。一方、通貨交換本部となつた日本銀行那覇支店でも、母店から刻々と入る通貨交換高の集計処理を徹夜で行うとともに、ドルの引き揚げ作業、円の追加輸送を実施した。息つく暇もない作業は、二十日まで六日間にわたって続いた。

幸いにも大きな混乱はなかった。運ぶ途中の現金にトラブルは生じなかったし、不眠不休の状態だった職員に体調を崩す者は見られなかった。

交換されたドルは五月三十一日、自衛艦「しれとこ」に積み込まれて沖縄軍港を出発した。その後はサンフランシスコ連銀へ引き渡される予定になっていた。そのとき、新木をはじめ、かわった職員たちを喜ばせる事実があった。

交換の総額が、なんと約一億三〇〇万ドルだったのだ。事前に立てた一億ドルとの予測と、ほとんど変わることがなかった。「おこがましいですが、あの推定

は神ワザと言っていていいかもしれませんがね」

今、堀内は、感慨を込めてそう振り返る。

支店長の新木と沖縄との間に、実は因縁めいたつながりがあった。

太平洋戦争の末期、まだ二〇歳を過ぎたばかりの頃、新木は鹿児島鹿屋の特攻基地にいた。「電探士官」が職名であり、電波探知機を担当し、米軍と戦っていた。

沖縄からの一本の打電を、たまたま新木が傍受した。それは、那覇市郊外の海軍壕にて約四〇〇〇の将兵が最期を遂げる際、司令官・大田實の発したメッセージだった。

……沖縄県民スク戦へり、県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ
そんな一節で結ばれていた。堀内が言つ。

「初代支店長になって、新木さんは大変な因縁をお感じになったと思う。『沖縄を向いて仕事をせよ』との教えは、もしかしたらあの打電を傍受したときより体に染みつ

いていたのかもしれませんが」
そう、通貨交換という一大事業を通して、新木は新木なりのやり方で、「特別の高配」を沖縄にもたらしてみせたのだ。

那覇支店を去つたのち、開店何周年といった記念の催しに呼ばれ、新木も堀内も現地を幾度か懐かしく訪ねている。

場所も建物も那覇支店は当時のままだ。ただ周辺の街並みは大きく変わった。県民にも日銀の職員にも、当時の懐かしい作業を詳しく知る人がいるはずもなく、自分たちの苦労は、すでに過ぎた日の思い出なのかもしれないと感慨に浸ることがあった。

それでも、あの当時の仕事が、自分の中で確かな礎になってくれたのもまた確かだと、忙しかった日々感謝を忘れることはない。

平成四年、支店開設二〇周年の記念式典を迎えた直後の夏、新木は心筋梗塞で倒れ、帰らぬ人となった。その面影をしのび、共に苦労した昭和四十七年の前後を思い出すとき、堀内の鼻の奥は、さくらいいよつもなく少しツンとしてしまつ。